

「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする(ヨハネ 8:31~32)」。

イエスはこれを「御自分を信じたユダヤ人たちに言われた(8:31)」。適度に「信じる」だけでなくその言葉に「とどまる」こと。この違いは大きい。

「君たちを自由にする」とは、「今の君たちは奴隷状態だ」という意味あいを暗に示している。だから彼らは「俺たちはアブラハムの子孫～奴隷になったことはありません(8:33)」と気色ばんだ。するとイエスは、厳かに「はっきり言うておく、罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である(8:34)」と告げた。

アブラハムの子孫を自負するユダヤ人には、真理(8:32)よりも誇らしい系図が自由の証拠となる。だがイエスは系図など何とも思っていない(8:37)。

ユダヤ人たちは、何かしら感ずることがあってイエスを信じた。しかしどうしても「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷(8:34)」という言葉、自分の事として受け入れられない。あるいはアブラハム系図の自尊心を軽く扱われて、逆上しているのか。

「罪の奴隷」とはどのようなことか。大袈裟に考えなくてもささやかな日常から容易に想像できる。「高慢、ねたみ、争い、中傷、邪推、言い争い(1テモテ 6:4~5)」など、日頃から人間は小さな「罪の奴隷」にされている。こんな小罪が権力や妄想を伴うと、たちまち巨大な罪に膨張する。両者は同根だ。

「他者の評価を気にしないで自分らしくなれた」なら、そりゃ良かったね、とは思う。だが人間を奴隷にする罪の支配から逃れられたわけではない。

罪の奴隷状態から解放される自由は、真理によってこそ実現する(8:32)。「真理」という言葉を口にするといかにも大仰だが、それを語りうるのはキリスト・イエス。

「わたしの言葉にとどまるならば～あなたたちは真理を知る(8:31~32)」。

イエスの言葉として現われた神の真理によって、私たちは「自由にされる」。イエスの言葉にとどまる時、私たちは真理に迎え入れられている。そしてそこに本当の自由が生ずる。これは観念ではなく、実感も伴う。

「自由」はそれほど尊いのか。自由は、人間にとって何よりも重要な状態だ。

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださった。だから～奴隷の軛に二度とつながれてはならない(ガラテヤ 5:1)」のだ。

そのために「キリストはわたしたちのために呪いとなって～贖い出してくださった(3:13)」。私たちが「とどまる」御言葉の真理と自由は、十字架の命の代償として実現する。

「主なる神の霊が～わたしを遣わして貧しい人に良い知らせを伝えさせるために～捕われ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために(イザヤ 61:1)」。

「貧しい(anav)」とは宗教的な飢餓のこと。つまり「捕われ、つながれ」奴隷状態にある人々に「良い知らせ(福音)」が伝えられる。

人間にとって福音こそが、預言者の昔から一貫して変わることのない真理。つまり自由と解放だ。

「キリストは呪いとなってわたしたちを贖い出してくださった(ガラテヤ 3:13)」。イエスの言葉に「とどまり(ヨハネ 8:31)」、「真理を知る(8:32)」とは十字架の「福音」に与ること。

人間によるすべての支配はもちろん、病や死からも自由にされる十字架の命。この命に、私たちはがっちり掴まされている。



#### 《おまけのひとこと》

この息苦しさの正体は何だろう 人はどこかで 自分は奴隷ではないかと うっすら気づいている 根っこに死の支配があり自由の可能性をふり払っているなら 耳を澄ましてキリストの福音を聴け